◆「被災メンバーとの懇談会」を実施して

みやぎ生協　生活文化部
地域活動事務局統括
課長 池町 江美子氏

かつての町内会など地域コミュニティーが減り、被災者の皆さんが自分たちの意見を伝える方法が失われていることを実感しました。場所によっては仮設団地の区長さんなどが上手に仕切り、住みよくするための取り組みが行なわれているようですが、大多数は住民間のコミュニケーションがうまくいっていないのが現状です。くらしの中の悩みを伝えたり、改善につなげる術がないようです。

今後を考えれば、誰もが前を向く気持ちになれないかもしれませんが、ありがたくも出席してくださる皆さんからは、伝える場を求める気持ち、また伝えることで誰かの役に立ち、今を変えていきたいという思いも感じとれました。

みやぎ生協は、県内の組合員加入率が世帯比で7割を超え、メンバー（組合員）さんの思いは県民の思いでもあります。これらの取り組みを通じてご意見を聞き、行政に伝える意義は大きいと思います。

被災メンバーの思いを受け取り、伝えていく

みやぎ生協では、10月6日より県北、石巻、仙南、仙台にある各ボランティアセンターにて参加者を募り、「被災メンバー（組合員）との懇談会」を実施してきました。折りに触れ被災者の声を聞くことに努めてきたみやぎ生協ですが、「国で三次補正予算の議論が始まったことや、首長・県議懇談などに被災されたメンバーさんの思いを伝えるために、今の思いをお聞きする懇談会を設けました」とみやぎ生協生活文化部の池町江美子さん。

参加メンバーやそのご友人からは「情報伝達が今も不徹底。目に見えて不公平が生まれている」「仮設住宅での近所付き合いは難しい。気持ちがすれ違うと親切もストレスに感じてしまう」など、率直な意見が寄せられました。仮設住宅を出た後の生活については「まだ考える余裕がない」「立案中の都市計画に気をもんでいる」「あの場所に住む気持ちは湧いてこない」など、思いは様々。画一的ではないきめ細やかな対応が求められます。

亘理町で行なわれた懇談会の様子。

一人ひとりが思いを伝えていく。

京都生協・志津川漁協で継続した支援活動

頑丈な土のう袋に、砂利を60kgずつ詰めていく。

ボランティアに参加された皆さん。

京都生協では、10月7日に夜行バスで京都を出発し、翌8日に、宮城県南三陸町志津川漁協にてボランティアを行ないました。このボランティアには、京都生協理事をはじめ、職員やその家族、また鳥取の生産団体の方や高校生など総勢41人が参加しました。

今回のボランティアでは、土のうづくりと炊き出しが中心に行なわれました。この土のうは、養殖わかめを作るいかだのおもりとして使用されるものです。土のうは当初1,000個作る予定でしたが、ボランティアの頑張りで1,200個作ることができました。

夕方からは、漁協の方やみやぎ生協職員との交流会が行なわれ、漁協の方より「今回の支援により、11月からのわかめの養殖に間に合います。これで、来年3月には南三陸産のわかめを出荷できる見通しが立ちました」と喜びの言葉をいただきました。